

防府マラソンに に臨んで

生物圏科学研究科博士課程後期
生物機能科学専攻一年

鶴崎 健一

平成三年十二月十五日、防府マラソンに臨み、自己最高記録で三位に入賞することができた。この場を借りて、もう一度このレースを振り返ってみたい。

いよいよスタート！

平成三年十二月十五日十二時〇二分。号砲が鳴る。六百名を越す大きな集団が雪崩のように動き出す。競技場のトラックを一周と百メートル回り、年末の防府路に飛び出して行く。四二・一九五キロの旅が始まる。

フルマラソンは今回で六回目。防府マラソンは二度目である。過去、福岡国際マラソン、琵琶湖マラソンと惨敗していた。「今回こそは」と心に秘めてのスタートだ。

静かな流れの中で……

五キロ、十キロといいペースでレースが流れて行く。風はないが気温は高め。無理をする選手はいない。先頭集団は二十名を越す大



34km付近の先頭集団右から私（ゼッケン7）、丁選手（韓国）、児玉選手（ゼッケン1）、李選手（ゼッケン3）

（読売新聞社提供）

集団。十五キロ、二十キロ。集団の流れに身を任す。無駄に力を使う必要はない。二十キロ過ぎの給水で前になる。給水で遅れないために。駆け引きの始まり。後方について

は置いていかれるかもしれないのだ。マラソン界の名門、旭化成の選手と先頭を引く張る。中間点、折り返し点を通過する。

アクシデント、そして……

二十キロを過ぎた頃だろう、突然両足のふくらはぎに痙攣がはしる。「完走できるのかな？」不安が頭をかすめる。二週間前の軽い肉離れ、そして四日前の発熱と完全な体調で臨んだわけではなかった。しかし、今さらやめられない。今年の最高目標に置いているのだし、意地でも三十キロまでは先頭について



ゴールの瞬間

(読売新聞社提供)

行くと決めていたのだから！
 集団の後方にまわり、様子を見る。二十五キロ、三十キロ。不安との戦い。幸い、集団のペースは上がらない。徐々に遅れる選手も目立つ。集団の人数も十人を切った。不安は「もう少し行ける」という希望へと変わる。

勝負!!

三十キロを過ぎ、マラソン日本記録保持者の旭化成の児玉選手がペースを上げる。急激なスピードアップではない。ついでに行けそう。集団は五人に絞られる。韓国選手二人と児玉選手、ベテランの神戸製鋼の喜多選手、

そして私。三十三キロあたりから、先頭を行く児玉選手と並ぶ。本当の勝負の始まりだ。三十五キロに差し掛かる頃、喜多選手が遅れる。あと七キロ。一瞬「勝てるかな？」と思う。その時である。三十五キロの関門の通過と同時に韓国の李選手が猛烈にスパート。あまりの早さについて行けない。差はほんどもん開く。勝負は決まった。

二位争い。児玉選手との並走が続く。もう一人の韓国選手はすでに遅れた。「何とかついて行きたい」その一念で粘る。一度、三十八キロあたりで離される。「諦めてはいけない」粘る。追い付く。また並走。四十キロの関門の前の坂を越える。ついにスタミナが底をつく。体が動かない。スピードががくつと落ち

る。「これまでか……」児玉選手の後姿がみるみる小さくなっていく。

独り、ゴールへ

あと二キロ。長い。四十二キロのうちたった二キロなのに。前を追う気力はない。後ろが気になる。時計を見る。このまま行けば自己記録は大きく更新できるはず。「でも……」過去の失敗が頭をよ切る。

あと六百メートル。競技場が見える。まだ遠い。トラックに入る。あと四百。やつとゴールが見える。あと二百。児玉選手のゴールする姿が見える。最後の直線百。やつと三位入賞と自己記録更新を確信する。もうスパートする力も残っていない。二時間十四分三十秒を示す時計を見ながらゴールへ。

ゴール直後、「きついな！」と叫ぶ。しかし、表情は緩んでいたに違いない。旅は終わった……。

今回の成績は、総合科学部の新畑先生他に援助していただき、また同学部の私の指導教官、倉石先生、桜井先生に多大のご迷惑をお掛けしました末の結果です。TVで観戦してくださいました方々にも感謝いたします。またこのような物語をお目に掛けることができるとは幸いです。その時には、ご声援お願いいたします。